

「ルカによる福音書」全体における裏返し構造

Contrast structure in “the gospel by Luke”

大喜多 紀明¹

¹滋賀民俗学会

Noriaki Ohgita¹

¹Folklore Society of Shiga

キーワード：裏返し構造，対称性仮説，聖書，ルカによる福音書

Key words: Contrast structure, Symmetry-hypothesis, Bible, The gospel by Luke

抄録

従来，裏返し構造は，異郷訪問譚にみとめられる構造であるとされてきたのだが，旧約聖書「創世記」におけるいくつかの物語と，新約聖書「マタイによる福音書」におけるいくつかの物語には，異郷訪問譚とは言えないにもかかわらず，裏返し構造が出現する事例が見いだされた。かかる裏返し構造の出現が，聖書全般にみとめられる特徴であるか否かを検証する目的から，本稿では，新約聖書に収納された「ルカによる福音書」をテキストとし，裏返し構造を照合することにより得られた構造的知見を資料として紹介する。

1. はじめに

物語分析において，ウラジーミル・プロップは，ロシアの神話の分析を行い，1969年には，これらが一定の形式的規則，つまり，31個の「機能」により構成されていることを示した⁽¹⁾。一方，クロード・レヴィ＝ストロースは，二項対立を組み合わせる観点による神話分析の手法を提示した⁽²⁾。こうしたプロップやレヴィ＝ストロースの研究をきっかけとして物語の構造分析の研究が進展した。プロップやレヴィ＝ストロースの知見を活用した研究は現在に至るまで極めて多く，具体例は枚挙に暇がないのであるが，ここでその一部分を紹介すれば，プロップについては曾根論文⁽³⁾や小方論文⁽⁴⁾，レヴィ＝ストロースについては沖田論文⁽⁵⁾や小田論文⁽⁶⁾などがある。

かかる，物語に対する構造分析の一連の試みのなかの一つに，ルーマニアのフォークロリストであるミハイ・ポップによるものがある。ポップは，1967年に，ルーマニアの昔話「兵士としての少女」に以下の図式⁽⁷⁾に示す構造を発表した⁽⁸⁾。

I. 欠如:

II. 欺瞞:

III. 試練:

IV. 暴力:

暴力の除去

試練の除去

欺瞞の除去

欠如の除去

ポップの知見を受けた大林論文⁽⁹⁾は，日本のいくつかの異郷訪問譚にかかるポップの構造（以下，本稿では「裏返し構造」と呼ぶ）がみとめられることを示したうえで，この構造が異郷訪問譚における構造上の「共通の約束」⁽⁹⁾であるという説を述べた⁽¹⁰⁾。大林の推認を受けた依田論文⁽¹¹⁾は，韓国のいくつかの異郷訪問譚を検証することにより，当該推認の蓋然性が高いことを示した。

また，大林論文は，裏返し構造について次のようにも述べている⁽⁹⁾。

早く言えば，ポップの方法は，構造分析における syntagmatic な見方と， paradigmatic な見方の双方を統合する試みと言えよう。

つまり大林は，裏返し構造を，統辞的・範列的双方を統合する視点から物語を分析する手法であるとの指摘をした。しかるに，この大林が指摘した

点が、裏返し構造による分析法の特徴の一つであると言える⁽¹²⁾。

ここで、従前の裏返し構造に関する研究⁽¹⁾⁽¹³⁾は、あくまでも分析対象を異郷訪問譚の範囲に限定しており、異郷訪問譚以外にも裏返し構造が出現するか否かに関する検証は行なわれてこなかった。この点を踏まえ、異郷訪問譚以外にもかかる構造がみとめられるか否かを調査することを目的に、大喜多(2016)⁽¹³⁾は、アイヌ民族を話者とする異郷訪問譚とは言えない口承文芸テキストを対象とした検証を行った。その結果、当該テキストにおいて裏返し構造が出現する事例が存在することが示された。そのうえで、大喜多(2016)は、交差対句⁽¹⁴⁾の使用を好む心性⁽¹⁵⁾が、かかる裏返し構造の出現の一因である可能性⁽¹⁶⁾を述べた。

さらに、大喜多(2017)⁽¹⁷⁾および大喜多(2018)⁽¹⁸⁾では、アイヌ民族によるテキストと同様に交差対句が頻出することが知られている聖書を題材に、対称性仮説の蓋然性に関する検討を行った。大喜多(2017)では、旧約聖書「創世記」に収納された、いくつかの異郷訪問譚と言えない物語を、大喜多(2018)では、新約聖書「マタイによる福音書」に収納された、いくつかの異郷訪問譚と言えない物語をとりあげ、これらに裏返し構造が見いだされることを示した。それにより、大喜多(2017)および大喜多(2018)は、対称性仮説の蓋然性が高いという見解を示した。

ところで、聖書には旧約聖書と新約聖書があり、かつ、旧約聖書は39の巻から、新約聖書は27巻から構成されている。そもそも、聖書は、単一の著者による著作物であるとは言えない⁽¹⁹⁾。また、聖書の著者の大部分は古代イスラエルを含めたイスラエル民族であると言えるが、新約聖書の「ルカによる福音書」および「使徒行伝」はイスラエル民族の出身ではないルカが著者であるとされている⁽²⁰⁾。つまり、聖書の著者が単一の民族の出身であるとも言えない。それに対し、大喜多(2016)で扱ったテキストはアイヌ民族(つまり単一の民族)によるものである。

つまり、確かに、大喜多(2017)および大喜多(2018)では、異郷訪問譚と言えないテキストにも裏返し構造が見いだされる事例は示されたものの、民族性とテキストの構造上の特徴を大喜多(2016)の場合のように単純に関連付けて推量することはできない。換言すれば、聖書の場合は、

聖書を構成する巻ごとに、当該巻の著者の属性や編集史などの要因を踏まえて議論をするべきであると言える⁽²¹⁾。また、かかる各巻に関する議論を踏まえたうえ、聖書全般における特徴について考察するべきであると言える⁽²²⁾。

以上を前提とし、本稿では、大喜多(2017)および大喜多(2018)が提示した箇所以外の聖書箇所である「ルカによる福音書」をテキストとし、裏返し構造を照合することにより得られた構造的知見を示すこととする⁽²³⁾。なお、本稿がもたらす知見は、聖書テキスト全般において大林の推認および対称性仮説が成立するか否かという点を検証する目的に資すると筆者は考えている。

ここで、裏返し構造とは、以下のAおよびBの双方の特徴を持つ構造のことを言う⁽²⁴⁾。

A: 物語の「前半」部分に配置された要素に対して、物語の「後半」に相当する要素が、「前半」の「否定」・「対立」もしくは「対照」としての関連性を持って出現する⁽²⁵⁾。

B: 物語の「後半」に配置された要素は、「前半」の対応する要素の配列順序とは逆の順番で出現する⁽²⁶⁾。

本稿においても、特徴Aおよび特徴Bの双方に合致する特徴を持つ構造を「裏返し構造」と呼ぶこととする。

なお、多くの物語分析の手法がそうであるように、本稿における分析の手法には恣意性が介入する余地があると言える。かかる点は、本稿における方法論上の課題であることをここで述べておきたい。

2. テキスト

本稿では、新約聖書に収納されている巻の一つである「ルカによる福音書」全体をテキストとする。以下は、筆者による、「ルカによる福音書」全体のあらすじである。なお、あらすじには、筆者による数字・記号が付されている。

—あらすじ

(A) 祭司ザカリヤとエリサベツは既に年老いており、子どもがいなかった。ザカリヤが祭司としての仕事をしていると、ザカリヤのもとに天使・ガブリエルが現れ、エリサベツが男の子を産むこ

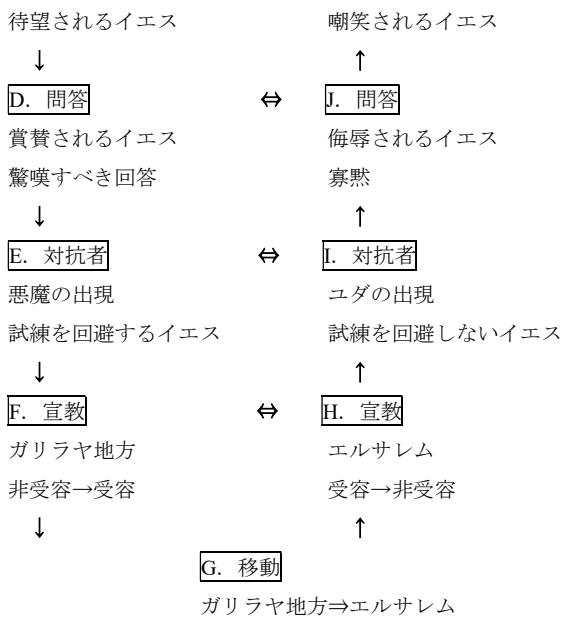
と、その男の子にヨハネと命名すべきことを告げた。ところが、この言葉をザカリヤが信じなかったため、ザカリヤは、ヨハネが誕生するまで口がきけなくなった。(A) (B) ヨセフは、妊娠している許嫁・マリヤを連れ、ナザレからベツレヘムに辿り着いた。滞在中、マリヤはイエスを産み、布にくるみ、飼葉おけ⁽²⁷⁾に寝かせた。(B) (C) イエスの姿を見るため、羊飼いたちが来訪した。八日後、エルサレムに行く時、信仰深い人であるシメオンとアンナがイエスをたたえた。その後、イエスとその家族はナザレに帰った。(C) (D) イエスが12歳の時、過越祭の際に、ヨセフとマリヤはイエスとともにエルサレムに上ってきた。祭りが終わり、ヨセフとマリヤはイエスをおいて帰路についたが、このことに途中で気が付き、急遽、エルサレムに引き返した。すると、イエスは、宮の中で、教師たちの真ん中に座り、問答をしていた。聞く人々は、イエスの賢さや答えに驚嘆した。それから、イエスは、ヨセフとマリヤとともにナザレに下って行った。時が経ち、ヨハネはヨルダン川でバプテスマを授けていた。そこにイエスが来訪し、ヨハネからバプテスマを受けた。その後、ヨハネは、領主ヘロデの悪事を指摘したことにより投獄される。それに対し、イエスは30歳から宣教を開始する。(D) (E) ヨルダン川から帰ったイエスは、40日間、荒野で断食をする。その後、悪魔がイエスを来訪し、三種類の試練を課するが、イエスはその試練を克服する。すると悪魔はイエスのもとを一時離れることとなる。(E) (F) イエスはガリラヤ地方に帰り宣教を行う。当初、イエスは、故郷で歓迎されないことを嘆くものの、次第にその成果が上がりはじめる。(F) (G) イエスはエルサレムに行く決意し、一行はエルサレムへと向かう⁽²⁸⁾。(G) (H) エルサレムに到着したイエスは、当初、群衆らにより歓迎される。だが、祭司長や律法学者たちは、民衆たちを恐れ、どうにかしてイエスを殺そうと計ることとなる。(H) (I) ユダは、祭司長たちを訪れ、イエスを引き渡すための協議をした。祭司長たちは金銭を渡し、ユダはイエスを引き渡すこととした。イエスが弟子たちを引き連れて祈ったのち、ユダは、群衆を引き連れてイエスのもとに近づいてきた。イエスは捕縛され、大祭司の邸宅に連れていかれることとなる。それにより、イエスの宣教活動は終結する。(I) (J) 夜が明け、イエスは議会に引

き出される。そこで、イエスが「神の子」なのとの問いかけに対し、イエスは同意する。その後、イエスはピラトのところに連行され、「あなたがユダヤ人の王であるか」と尋ねられ、それに「そのとおりである」と答えた。ピラトはイエスに罪を認めなかった。さらにヘロデに引き渡され尋問されるものの、イエスは何も答えなかった。祭司長や律法学者らは激しくイエスを訴え、ヘロデは兵卒たちと共にイエスを侮辱したうえで、ピラトのところに送り返した。ピラトは、祭司長・役人たち・民衆を集め、彼らに対し、イエスには罪を認められないので、むちを打ったのちにイエスを釈放すべきだという提案をした。だが、彼らはイエスを十字架につけて殺害することを要求し、これが決定された。(J) (K) イエスは、二人の犯罪人とともに十字架につけられた。イエスを取り巻く民衆や役人たちはイエスをあざ笑った。イエスは、「父よ、彼らをゆるしてください」と述べ、人々の赦しを乞うた。(K) (L) イエスは殺害され、亜麻布により包まれ、岩を掘って造った墓に納められた。週の初めに女たちが墓に行くと、イエスの遺体はなくなっていた。(L) (M) その後、二人の弟子がエマオに向かいつつ、今までのことを論じていると、イエスが近づいてきたのだが、弟子たちは、それをイエスとみとめることができなかった。だが、一緒に食事をしていると目が開け、イエスをみとめることができるようになった。エルサレムでは、弟子たちの中にイエスが現れ、惑う弟子たちに対し、信じるべきこと、弟子たちがエルサレムに留まるべきことを告げた。(M)

3. 構造

本節では、2節のあらすじに付した数字・記号に基づいて作成した図式を以下に示す。

A. 不自由と不信	⇔	M. 不自由と不信
ヨハネの誕生を認めない		イエスをみえない
⇒ザカリヤ口がきけなくなる		⇒イエスが認知させる
不信する		不信すべきではない
↓		↑
B. 生命と配置	⇔	L. 生命と配置
イエスの誕生		イエスの死
飼葉おけ		石窟
↓		↑
C. イエスの評価	⇔	K. イエスの評価



以下、上述の図式に基づき、かかる図式を構成するAからMの要素がはたしてどのような関係にあるか、の検討を行いたい。

AとMについてである。AとMは双方ともに「不自由と不信」をテーマとしている。Aでは、ザカリヤは天使・ガブリエルにより、ヨハネが誕生することを告げられるのだが、このことをザカリヤは「不信」し、その結果、ヨハネ誕生まで口がきけないという「不自由」な状態になってしまう。それに対し、Mでは、弟子たちは近くにいるイエスをみとめることができない「不自由」な状態であったのだが、イエスと食事をしている間に、弟子たちの「不自由」が解決し、イエスを見ることができるようになる。また、イエスは弟子たちに対し信じるべきであること（換言すれば、「不信」の否定）を要請する。かつ、「不自由」と「不信」の要素が出現する順序については、Aがザカリヤの「不信」に続いて「不自由」をこうむるという順序（←）であるのに対し、Mでは、弟子たちの「不自由」が解決した後イエスが「不信」を否定するという順序（→）であり逆転している。以上より、AとMは対照的であると言える⁽²⁹⁾。

	不自由	順序	不信
A	こうむる	←	ザカリヤの不信
M	解決	→	イエスによる不信の否定

続いて、BとLである。BとLはともに、「生命

と配置」をテーマとしている。Bでは、イエスの「生命」が誕生する場面が描かれている。対し、Lには、イエスの「生命」が失われる場面が描かれている。ここでの「生命」の誕生と死は対照的である。また、Bでは、イエスは飼葉おけに「配置」される。一方、Lにおいて、イエスの死体は新しい墓に葬られるのだが、ここでの墓は石窟を意味する。つまり、Bではイエスは小さな窪みに「配置」されるのだが、Lではイエスは大きな窪みに「配置」されるため、かかるイエスが「配置」された窪みの規模（容量）は対照的であると言える。

CとKのテーマは、ともに「イエスの評価」である。Cでは、イエスはまず、シメオンとアンナによりたたえられる。対し、Kでは、イエスは彼を取り巻く民衆や役人たちに嘲笑される。つまり、Cにおける「イエスの評価」は高いのだがKでの評価は低く、双方は対照的である。

DとJは「問答」がテーマである。Dでは、イエスは宮の中で教師たちに囲まれ、問答をしている。対するJでも、イエスは議会、ヘロデおよびピラトのところで人々に囲まれ、問答をしている。Dの場合、イエスは人々が驚嘆する回答を述べるのだが、Jでは、イエスは寡黙である。また、Dではイエスは賞賛されるのだが、Jでは逆に訴えられ侮辱される。このように、DとJは対照的であると言える。

EとIは、ともに「対抗者⁽³⁰⁾」との関係がテーマである。Eでは、イエスの前に悪魔⁽³¹⁾がイエスの「対抗者」として出現する。なおここでの悪魔は人間とは言えない。また、悪魔はイエスを試練するものの、それをイエスは回避する。その結果、悪魔はイエスのもとを離れることとなる。それに対し、Iでは、イエスの弟子の一人であるユダ⁽³²⁾がイエスの「対抗者」として現れる。また、ユダによるイエス捕縛の試みは成功する（「対抗者」による試練を回避しない）こととなる。

	対抗者	イエス
E	悪魔（人間とは言えない）	試練を回避する
I	ユダ（人間である）	試練を回避しない

つまり、EとIでは、イエスの「対抗者」が人間とは言えない悪魔である点と人間であるユダである点が、また、「対抗者」の試みが成就しない（イエ

スが試練を回避する)点と成就する(イエスが試練を回避しない)点が、それぞれ対照的である。

FとHは、ともに「宣教」がテーマである。Fにおいてイエスが「宣教」した場所はガリラヤである。ここでの「宣教」は、当初は困難な状況であったが、次第に成果が表れることとなる。それに対し、Hにおいてイエスが「宣教」した場所はエルサレムである。ここでの「宣教」において、イエスは当初は歓迎されるものの、次第に困難を極めることとなる。ここで、イエスの「宣教」場所であるガリラヤとエルサレムについて、高橋は次のように述べている⁽³³⁾。

イエスや弟子たちの出身地として非常に重要なガリラヤ地方であるが、ガリラヤ地方は首都エルサレムなどの南方の人々には軽蔑されていた地域であった。それは、ヨハネ福音書の7:41や7:52で、ガリラヤからメシアや預言者はいないと述べられていることから見えてくるだろう。ただし、ガリラヤ地方が蔑視されているのはイエスの時代に始まったわけではない。イザヤ書やマカバイ記には「異邦人のガリラヤ」とあり、昔から南方のユダヤ人にとって、ガリラヤはパレスチナの地であるにも関わらず、異邦人の臭いのする地方だったのである。

つまり、ガリラヤは首都エルサレムの人々からは蔑視されており、かつ、「異邦人の臭い」がする場所であった。また、エルサレムには神殿があった。換言すれば、エルサレムがイスラエルにおける宗教上の中心地であるのに対し、ガリラヤは異教の雰囲気がある地域であった。以上は、ガリラヤとエルサレムが対照的な場所であることを示唆している。なお、ガリラヤが蔑視され、エルサレムの権力により統治されてきた意識があったことについて、松原論文⁽³⁴⁾は次のように述べている。

ナザレのイエスという時、前述のように、辺境の地ナザレ出身ということが、既に差別の対象となっていることを認識しておく必要がある。田川建三によれば「ガリラヤの民衆は歴史のふちに忘れ去られ、辺境の土着民として平凡な歴史の被害者としての生涯を長い間送っていた」のである。実際に、パレスチナ北部という辺境の地に生活するガリラヤの人々は、エルサレム

の権力により侵略され支配され、統治されて来たという意識が強烈であったといえよう。

さらに、ガリラヤでの「宣教」は次第に進展したのだが、反対に、エルサレムでの「宣教」は次第に窮地に追い込まれ終息に至る。この点も対照的であると言える。

Gについては、テキスト全体の折り返しに位置している。

ここで、以上を、特徴Aおよび特徴Bと照合してみたい。テキストは、AとM、BとL、CとK、DとJ、EとI、FとHがそれぞれ対照的な関係性を持って出現している。かかる点は、特徴Aと合致している。また、前半要素はA→B→C→D→E→Fという順序で配列しているのに対し、後半要素はH→I→J→K→L→Mという順序で配列しており、前半とは逆転している。かかる点は、特徴Bと合致する。したがって、テキストは特徴Aと特徴Bの双方に合致するので裏返し構造である。

以上、2節に提示したあらすじに基づけば、「ルカによる福音書」全体は、合計6対の対応を持つ裏返し構造により構成されていることがわかった。

注

- (1)例えば、ウラジーミル・プロップ。北岡誠司、福田美智代(訳)。昔話の形態学。水声社、1987。
- (2)例えば、クロード・レヴィ＝ストロース。田島節夫(訳)。神話の構造。みすず書房、1972。
- (3)曾根素子。イヌイット民話の構造について。名古屋女子大学紀要。人文・社会編。1993,(39), p.307-319。
- (4)小方孝。プロップから物語内容の修辞学へ—解体と再構成の修辞を中心として—。認知科学。2007,14(4), p.532-558。
- (5)沖田瑞穂。『マハーバーラタ』における反復と変形の構造。宗教研究。2003,77(3), p.655-678。
- (6)小田亮。物語に抗する神話と小説：レヴィ＝ストロース神話論のために。桃山学院大学人間科学。1991,(2), p.1-20。
- (7)ポップの論文の図式は、図式を構成する各要素がルーマニア語で書かれているのだが、本稿では便宜上、各要素を筆者による日本語訳に置き換えた。
- (8)大林論文⁽⁹⁾によれば、ポップの構造の初出は『Folclor Literar』(1967年出版)に収納されたが

- ップの「Metode noi in cercetarea structurii basmelor」であるが、筆者はこの論文を入手することができなかった。その代わりとして、筆者は、当該箇所が再掲された論文である Pop, Mihai. “Coordonate structurale ale folclorului literar”. Folclor literar românesc. 1990, p. 77-92. を参照した。
- (9)大林太良. 異郷訪問譚の構造. 口承文芸研究. 1979, (2), p.1-19.
- (10)本稿ではこれを「大林の推認」と呼ぶ。
- (11)依田千百子. 韓国の異郷訪問譚の構造. 口承文芸研究. 1982, (5), p.47-57.
- (12)裏返し構造に関する研究は、プロップやレヴィ＝ストロースの分析法に比べ、注目されてきたものであるとは言えない。
- (13)大喜多紀明. アイヌ口承テキストに見られる裏返し構造：異郷訪問譚によらない事例. 北海道言語文化研究. 2016, (14), p.45-72.
- (14)「交差対句」は、「キアスムス」「交叉配列」などとも呼ばれるが、本稿では「交差対句」という呼称を使用する。
- (15)この場合はアイヌ民族の心性である。
- (16)本稿ではこれを「対称性仮説」と呼ぶ。
- (17)大喜多紀明. 聖書「創世記」冒頭の5つの物語の構造：異郷訪問譚によらない裏返し構造の事例. 北海道言語文化研究. 2017, (15), p. 195-216.
- (18)大喜多紀明. 新約聖書「マタイによる福音書」の冒頭に配置された5つの物語の構造：「対称性仮説」の蓋然性. 北海道言語文化研究. 2018, (16), p. 25-48.
- (19)いのちのことば社. 聖書 新改訳 注釈・索引・チェーン式引照付. いのちのことば社, 1981.における各巻の注釈箇所を参照した。
- (20)ルカはギリシャ人であり、ユダヤ人にとっての異邦人であった。この点について、鈴木文治. キリスト教におけるインクルージョン研究Ⅱ：ルカ神学における「異邦人理解」. 田園調布学園大学紀要. 2016, (11), p.56. は次のように述べている。「ルカ自身がギリシャ人であり、すなわち異邦人であったという事実が、異邦人の救いへの強い関心を生み出し、キリスト教が世界宗教へと発展する足場を作ったと考えられる。」
- (21)聖書テキストに関する詳細な分析はエドモンド・リーチが行っている。ただし、リーチの分析は、裏返し構造に基づいたものではない。
- (22)本稿では、巻の著者の属性や編集史を踏まえた議論は行わないこととする。
- (23)本稿でとりあげた「ルカによる福音書」は、新約聖書に収納された27巻の内の1巻に過ぎない。つまり、当該範囲は、聖書全体から見れば極めて狭い範囲であると言える。筆者としては、今後、聖書の他の箇所に関する検証も、裏返し構造を当てはめる観点から行う予定である。また、本稿では、当該テキストが異郷訪問譚と言えるかという点を含め、本稿で示す当該テキストの構造と異郷訪問譚との関連については言及しないこととする。なお、この点については別の機会に述べるつもりである。
- (24)本稿の先行研究である大喜多(2016)、大喜多(2017)、大喜多(2018)における裏返し構造の定義も同様である。
- (25)本稿ではこれを「特徴A」と呼ぶ。
- (26)本稿ではこれを「特徴B」と呼ぶ。
- (27)当時の「飼葉おけ」がどのようなものであったにせよ、常識的に考えると、その規模(容量)は決して大きいとは言えない。
- (28)この箇所は、一般には「ルカの旅行記」などと呼ばれる。この箇所に関する分析は別の機会に行うつもりである。
- (29)ここで、BからMのすべてが、イエスの動向に関連しているのだが、Aはヨハネ誕生に関連する出来事であり、イエスの動向とは直接関連していない。かかる点に関する考察は別の機会に述べる予定である。
- (30)本稿では、イエスに敵対し、彼に直接的に試練を与える存在(ここでは「悪魔」と「ユダ」)を「対抗者」と呼ぶこととする。
- (31)ここでの「悪魔」は人間とは言えない。
- (32)「ユダ」は当然に人間である。
- (33)高橋博厚. 「ガリラヤ人」という呼称に関する考察：ヨセフスとユリアヌスを中心に. 神学研究. 2014, (61), p.79-90.
- (34)松原栄. 被差別者としてのイエス：キリスト存在への自己意識の問題. 桃山学院大学キリスト教論集. 1986, (22), p.29-46.

(受付日：2018年4月3日，受理日：2018年4月18日)

大喜多 紀明（おおぎた のりあき）

現職：一般社団法人地域コミュニティ談話会代表理事

東京工業大学大学院総合理工学研究科電子化学専攻修士課程修了。理学修士。
専門は民俗学。

主な論文：アイヌ女性叙事詩「スズメの酒盛り」についての考察：交差対句と心意。アジア民族文化研究。2012, (11), p.181-213.

聖書「創世記」冒頭の5つの物語の構造：異郷訪問譚によらない裏返し構造の事例。北海道言語文化研究。2017, (15), p.195-216.